柘枝伝説歌覚書

北谷幸冊

『萬葉集』巻第三に「仙柘枝の歌三首」との題詞を付して、次の三首が収められている。

あられふり吉志美が嶽を険しみと草とりはなち妹が手を取る　（巻三―三八五）

右一首、或云、吉野人味稲、与二柘枝媛一歌也。但、見二柘枝伝一、無レ有二此歌一。

この夕柘のさ枝の流れ来ば梁は打たずて取らずかもあらむ　（巻三―三八六）

右一首

古に梁打つ人の無かりせば此処にもあらまし柘の枝はも　（巻三―三八七）

右一首、若宮年魚麻呂作

本稿では、これらの歌を検討し、歌の舞台についても考えてみたい。

一

先ず、題詞によれば三首は「仙柘枝の歌」であると言い、三八五番歌の左注によると、この一首は、吉野の人味稲が柘枝仙媛に贈った歌であるという。ところが、おそらくは『萬葉集』の編纂者が、「柘枝伝を見るに、この歌有ることな

し。」と記しているように、三八五番歌は仙柘枝伝説とは関係のないものであったらしい。

その三八五番歌については異訓もあるので、若干触れておくことにする。先ず、初句は、古写本に「霰零」とあるのを、アラレフルと訓む説[1]もあるが、集中の仮名書きに「阿良例布里　可志麻能可美乎」(二〇—四三七〇)ともあるので、アラレフリと連用形に訓む説[2]に従った。また、第四句目は「草取」とある下に、「可奈和」(西本願寺本)、「所奈知」(細井本[三])、「可奈知」(紀州本)などとあるが、誤字説によって「叵奈知」と訓む『定本萬葉集』によることとした。クサトリカナワと訓んで「草をもつかみかねて」(私注)「草につかまりそこなって」(小学館古典全集)と解するもの、クサトリハナチと訓みながらも「つかんだ草を放して」(全註釋)と意をとるものがあるが、ここは、「草を取り除けて、妹の手をとることだ」との意、「妹が手を取る」は、男に「下心あっての行為」(全注)ではなくて、妹への思いやり、深い愛情表現のひとつのパターンではなかろうか。「あられふり」は、キシキシと音がする意からキシミに懸る枕詞。「吉志美が嶽」は山の名で、左注によると吉野山中に求められようが、今のどこであるか明らかではない。岩波古典大系や小学館古典全集をはじめ多くの注釈書があげる『肥前国風土記』逸文に、「あられふる杵島が岳をさかしみと草取りかねて妹が手を取る」があり、これは杵島曲と称する歌曲であるという。また、『古事記』仁徳天皇の条には、「梯立ての倉橋山を嶮しみと岩かきかねて我が手取らすも」との速総別王の歌があり、これは、天皇の弟である速総別王が女鳥王と駆け落ちした折に詠んだものである。三八五番歌も、もともとは民謡であったこれらの歌を「漁夫味稲の立場に立って仙女への気持ちを述べ」(新潮古典集成)るのに借用したものであろう。

二

「柘」は、音読してシャであるから、あるいは「柘枝伝」とも称したかと思われるが、いまその伝説の筋を知るこ

とは困難である。

『萬葉集』以外の資料を辿ってみれば、『続日本後紀』第十九巻の仁明天皇嘉祥二年（八四九）三月の条に、次のような長歌の見られるのが少ないうちの一つである。歌は、興福寺の大法師等が天皇の四十歳の賀に奉ったもので、

……　帝が御世　万世に　重ね飾りて　栄えしめ　たてまつらむと　柘の枝の　由求むれば　仏こそ　願ひ成し
たべ　……　み吉野に　ありし熊志称　天つ女の　来り通ひて　その後は　譴かがふりて　領巾衣着て　飛びにき
と云ふ　……

とある。「熊志称」とあるのは、『萬葉集』にいう「味稲」と同一人物であろうが、ここから知ることができるのは、「吉野の熊志称のもとに天女が通って来て一緒に住んでいたが、後に譴責せられて羽衣を着て飛び去った」という事だけであって「柘枝伝説」なるものの全貌を探ることはむづかしい。他には、『懐風藻』（七五一年成立）に載る漢詩数編がある。これは次に検討してみるが、やはり「柘枝伝説」の全体を伝えるものではない。

三

『懐風藻』にみえる吉野に関わる漢詩のうちで、多少とも伝説に触れていると思われるものは次の如くである。（訓みは、岩波古典大系本『懐風藻』による。）

吉野に遊ぶ　　藤原朝臣史

文を飛ばす山水の地、爵を命す薛蘿の中。
漆姫鶴を控きて挙り、柘媛魚に接きて通ふ。
煙光　巌の上に翠にして、日影滑に紅なり。

翻りて知る玄圃近きことを、対翫す松に入る風。

「漆姫」は七人の天女で、八人居た天女のうち水浴中であった柘媛を残して七人の姫は鶴を伴って天に飛び去ったのであるとの説[3]があるが、漆姫伝説と柘媛伝説とは別のものである。「柘媛魚に接きて通ふ」は、「柘枝姫が魚に接近して美稲という男と情を通じた」(岩波古典大系)ことをいう。以下の漢詩にも詠まれている様に、吉野は仙女の住まう神仙境であった。

吉野宮に遊ぶ　　中臣朝臣人足

惟れ山にして且惟れ水、能く智にして亦能く仁。
萬代埃無き所にして、一朝柘に逢ひし民あり。
風波轉曲に入り、魚鳥共に倫を成す。
此れの地は即ち方丈、誰か説はむ桃源の賓。

「一朝柘に逢ひし民あり」の「民」は、美稲。明らかに柘枝伝説をふまえている。その内容については述べられていないが、神仙の住む吉野の地は陶淵明の「桃花源記」にいう桃源郷以上の仙境であることを歌う。

吉野川に遊ぶ　　紀朝臣男人

万丈の崇巌削成して秀で、千尋の素濤逆折して流る。
鐘池越潭の跡を訪はまく欲り、留連す美稲が槎に逢ひし洲に。

「吉野の地をたずねようとして、昔美稲が柘枝媛に出会ったという吉野川の洲に停留することだ」、という。「槎」は、浮き木。『大言海』(大槻文彦)には「いかハ浮ぶノ語転ナルベシ、たハ板ノ上略。」とある。ここでは柘の木の枝をさしている。

吉野山に遊ぶ　　丹墀真人広成

山水臨に随ひて賞で、巌谿望を逐ひて新し。
朝に峰を度る翼を看、夕に潭に踊る鱗を翫す。
放曠幽趣多く、超然俗塵少し。
心を佳野の域に栖まはしめ、尋ね問ふ美稲が津。

「美稲が津」は、美稲が柘枝媛と逢った川辺。結句は、陶淵明の「桃花源記」に「後遂二無一問レ津ヲ者一」とあるによっている。この詩においても、吉野が、「桃花源記」の桃源郷にも勝る地であることを意識している。

吉野川に遊ぶ　　藤原朝臣萬里

友は禄を干むる友に非ず、賓は是れ霞を飡ふ賓なり。
縦歌して水智に臨み、長嘯して山仁を楽しぶ。
梁の前に柘吟古り、峡の上に簧声新し。
琴樽猶未だ極まらねば、明月河浜を照らす。

「柘吟」は、柘枝媛が美稲と唱和した歌。それは遙か昔のことであると、柘枝伝説を想起している。「琴樽」は、「琴を弾き酒を飲む歓楽」(岩波古典大系)。なお、『古事記』雄略天皇の条に、吉野川の童女と聖婚した天皇が神仙となって、琴を弾き童女に舞わせて、「呉床座の　神の御手もち　弾く琴に　儛する女　常世にもがも」と歌う話があり、ここにも神仙思想の投影が認められる。

賀に吉野宮に従ふ　　高向朝臣諸足

在昔魚を釣りし士、方今鳳を留むる公。

琴を弾きて仙と戯れ、江に投りて神と通ふ。
柘歌寒渚に泛かび、霞景秋に飄る。
誰か謂はむ姑射の嶺、蹕を駐む望仙宮。

初句の「在昔魚を釣りし士」は、美稲のこと。「柘歌」は、右の漢詩の「柘吟」におなじ。柘枝媛と美稲との唱和が、秋深い川べりに聞こえるようだ、という。吉野は、仙人が住むという「藐姑射の山」にも匹敵する地だと、称えている。

吉野の作　　丹墀真人広成

高嶺嵯峨奇勢多く、長河渺漫廻流を作す。
鐘池超潭凡類を異にし、美稲が仙に逢ひしは洛洲に同じ。

「洛洲」は、洛水(黄河の支流)の洲のことで、『文選』に洛水の神女が登場する曹植の「洛神賦」がある。[4] 美稲が柘枝媛に逢った吉野川の淵は、洛水の洲の如き趣であることをいう。

以上七首の漢詩は、吉野における柘枝媛の故事に深くかかわっている。ほかに、伝説の内容について触れるところは少いが、やはり柘枝伝説を意識する詩には次のようなものがある。

駕に吉野宮に従ふ、応詔　　大伴王

山幽けくして仁趣遠く、川浄けくして智懐深し。
神山の迹を訪はまく欲り、追従す吉野の潯。

吉野宮に扈従す　　紀朝臣男人

鳳蓋南岳に停まりたまひ、追ひ尋ぬ智と仁とを。
谷に嘯きて孫と語らひ、藤を攀ぢて許と親ぶ。
峰巌夏景変はり、泉石秋光新し。
此れの地は仙霊の宅、何ぞ須ゐむ姑射の倫。

駕に吉野宮に従ふ　　吉田連宜

神居深くして亦静けく、勝地寂けくして復幽けし。
雲は巻く三舟の谷、霞は開く八石の洲。
葉黄たひて初めて夏を送り、桂白けて早も秋を迎ふ。
今日夢の淵の上に、遺響千年に流らふ。

『懐風藻』に収める一二〇首の詩のなかで、題に「吉野」(「佳野」)の二字を有するものは十六首あり[5]、そのうち右に挙げた十首は何らかの形で柘枝伝説に触れていると言える。他の六首は、藤原朝臣史・中臣朝臣人足・大伴王・大津連首・藤原朝臣宇合・葛井連広成の作に成る、それぞれ一首であるが、いずれも吉野を俗世間から離れた幽静の地として歌っていることに変わりはない。古人が深く「桃花源記」や『文選』に通じていたこと、併せて吉野の地が神仙境として強く意識されていたことが認められる。

四

再び『萬葉集』にかえって、三八六番歌・三八七番歌をみることにする。「味稲」は、吉野川に梁を仕掛けて漁をするこ

とを業としている人であった。『萬葉集』には「味稲」とあり、『続日本後紀』の長歌には「熊志祢」、『懐風藻』には「美稲」とあるこの人物は、表記から推測すれば農業ともかかわる人であったと思われる。吉野に居住した人であるところから、その土地の風土にふさわしいなりわいをしていたといえよう。吉野川に梁を打っての漁については、「阿太人の梁打ち渡す瀬を速み心は思へど直に逢はぬかも」(一一一―二六九九)があり、『古事記』中巻・神武天皇条には「(伊波礼毗古命が)八咫烏の後より幸行せば、吉野河の河尻に到りましし時に、筌を作せて魚取れる人あり」、『日本書紀』神武天皇即位前紀戊午年秋八月条には「(神武天皇が)水に縁ひて西に行きたまふに及びて、亦梁を作ちて取魚する者有り」との記述がみえる。

また、「柘」は、『新撰字鏡』に「豆美」、『和名抄』に「都美」とある植物で、仙覚の『萬葉集註釋』には「柘者、似レ桑三、有レ刺木也」と注している。小清水卓二は、山桑であろうとして、我が国各地の山野に自生し、人生に深い関わりを持つ植物であったことを説いている。[6]

三八六番歌は、柘の枝が川を流れて来たならば取らずにはおかないだろう、というのであるが、作者名は記されていない。「右一首」とのみあるのは、伝写の過程で脱落したものだろうか。

三八七番歌は、味稲のような男がいなかったならば、柘の枝が今ここにもあるだろうに、と残念がっている趣の一首である。作者、若宮年魚麻呂もまた柘枝媛に心寄せた人であるが、集中ほかの箇所に名を見出すことはできず、この人については伝未詳というよりない。

『続日本後記』の長歌と、『懐風藻』の漢詩、それに『萬葉集』の三首とを考えあわせて詳細な検討を試みたのは土田杏村であった。氏は柘枝伝説の内容を、

吉野川の或る場所に常に八人の天女が降って来て水浴をした。(『懐風藻』)

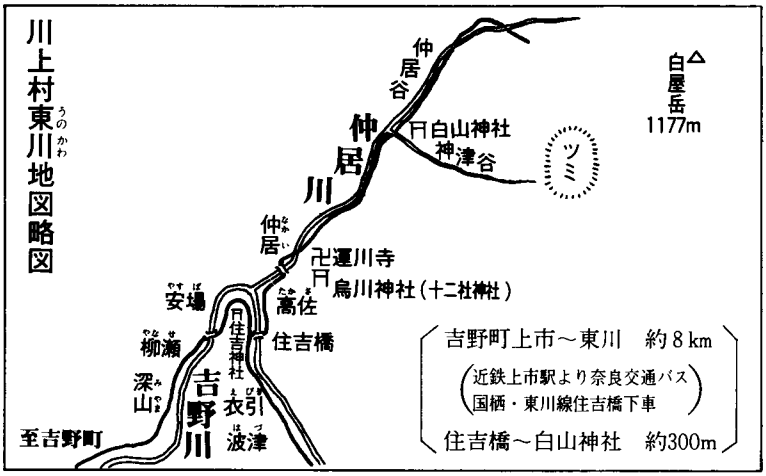
吉野に梁を打って魚を取ることを業とした味稲といふ男があった。（『懐風藻』『萬葉集』）
天女の一人柘の枝媛が姿を柘枝に変へて水中に浴してゐた時、味稲に拾ひ取られた。（『懐風藻』『萬葉集』）
他の七人の天女は羽衣を着けて天に飛び去った。（『懐風藻』）
柘の枝姫は味稲と結婚した。（『懐風藻』）
その後味稲は天女と婚することを以てその筋より譴責せられ、共に携へて遁れ出た。（『続日本後紀』）
天の羽衣を着けて天女と味稲とは天に飛び去った。（『続日本後記』）

と、推定している。先にも述べたように、藤原朝臣史の詩に出ている「漆姫」を七人の天女と解しての推定であるが、おおよその話の筋は土田氏のまとめられた通りである。

『萬葉集』にみえる伝説歌を分類して、川村悦磨は「肉体を有しない神のみが人間と結婚せん為に、一時人間の形を取る」形の「神婚神話」と説き、西村真次は「神婚伝説歌謡」[8]と呼び、尾崎暢殃氏は「穀霊信仰を基盤とする白鳥処女説話の要素」を有するもので、三輪山型・丹塗矢型・羽衣型・浦島型・海幸山幸型のいずれの説話とも接触をもつことを指摘している。[9] 須佐之男命が出雲の国に至った折に箸が流れて来た（『古事記』上巻）のは今の斐伊川であり、三輪の大物主神が丹塗矢に化して流れ下った（『古事記』中巻）のは三輪川であったが、当面の柘枝伝説歌の舞台は吉野、吉野川に深くかかわっている。

五

ところで、奈良県吉野郡川上村大字東川にツミという小字がある。『萬葉集』の「柘」をすぐに地名に結びつけて考えることは難しいかとも思われるが、ツゲ・カシ・トチ・ナラなどの植物を地名に用いた例は各地に見出すことがで



きる。さらに、吉野川の支流にあたる仲居川の流域には、ヤナセ（今は「柳瀬」と表記する。）と呼ぶ大字がある。ヤナセは、漁のために梁を仕掛けたところからの地名であることは間違いなく、川辺にこの名の地は多い。ツミは柘枝仙媛の住まうところで、味稲が梁を仕掛けて柘枝を拾いあげたのはヤナセの辺りであったと想定するならば、三八五番歌の「吉志美が嶽」もこの地の山（白屋岳、あるいは東方の薊ケ巌。）を当てることが考えられよう。

現在、東川は人口約五五〇、川上村内の大字のなかでは抽きんでて人口の多い集落である。古くから吉野町国栖と、川上村の大字白屋・武木・井光を結ぶ交通の要路にあたり、川上村への入口として栄えた。今も東川に祀る白山神社では山桑を霊木とし、それで弓を作って祭礼を行っている。また、『寛永郷帳』に「鵜川村」とあるのは、漁との関わりを思わせる。

ツミは山字であり、林業に従事する人のほかは分け入る人も少いが、深山幽谷の吉野山中、川上村東川周辺こそ柘枝伝説の舞台にふさわしい所である。なお、近世の小説『本朝水滸伝』（建部綾足作）に、「味稲の翁仙女と契りて百人の子をまうく」話がある。

注

(1) 萬葉集註釋(仙覚抄)、代匠記初稿、拾穂抄、全訳注原文付。
『肥前風土記』逸文に、「婀邏礼符縷　耆資熊加多埴嶋」とあるによっている。

(2) 代匠記初書入、略解、古義、井上新考、口訳、窪田評釋、全註釋、注釋、私注、岩波古典大系、小学館古典全集、新潮古典集成、全注。

(3) 契沖『萬葉代匠記』、土田杏村「仙柘枝伝説原形論」(『教育学術界』〔昭和三年〕後に『土田杏村全集』巻十一〔昭和十年十月、第一書房〕に所収。)

(4) 曹植(一九二―二三二)は、三国時代の魏の詩人。字は子建。「洛神賦」は曹植の代表作で、「黄初三年、余は京師に朝し、還りて洛川を済る。古人言へる有り、斯の水の神、名づけて宓妃と曰ふ。」と始まる。

(5) 土田杏村は、吉野に関わる詩十六首を指摘しながら、「『懐風藻』に吉野に関しての詩として載るもの十五首中、十首は多少ながら伝説に触れ、他の五首は全然伝説に触れないものであった。」(「仙柘枝伝説原形論」)と書いている。

(6) 小清水卓二「古文に出てくる柘とはどんな植物か」(『大和志』第二巻第十二号〔昭和十年十二月、大和国史会発行〕)

(7) 川村悦麿『萬葉集伝説歌考』〔昭和二年十一月、甲子社書房〕

(8) 西村真次『萬葉集伝説歌謡の研究』〔昭和四十八年六月、第一書房〕

(9) 尾崎暢殃「仙柘枝の歌」(『万葉集を学ぶ』〔昭和五十三年三月、有斐閣〕後に『萬葉歌の形成』〔昭和五十六年三月、明治書院〕に所収。)

(10) 白屋岳は川上村にあり、一一七七メートル。薊ケ嶽は東吉野村にあり、一四〇六メートル。薊ケ嶽について、『大和志料』〔大正四年、奈良県教育会発行〕には「四郷村大字麦谷村ニアリ、山岳高ク聳エ盤曲シテ巓ニ到ル、瀑布アリ和佐羅ト名ク。」と記し、続けて『萬葉集』の「和射美の峰行き過ぎて降る雪の厭ひもなしと申せその児に」(巻十一二三四八)の上二句を「あざみの嶺行過きて降雪の」として引用している。なお、四郷村字麦谷村とあるのは、現在の東吉野村麦谷である。